

地域連携プロジェクトによる、まちづくり活動参加実践 と教育における成果 (地域課題解決奨励金事業 報告)

天野 了一

キーワード：地域連携、アクティブ・ラーニング、PBL、まちづくり

1. はじめに

大阪府南部の南河内地域に立地する四天王寺大学では、大学のある大阪府羽曳野市と 2013 年に、大学の最寄り駅である近鉄南大阪線の藤井寺駅のある大阪府藤井寺市とは 2014 年に、それぞれ「包括的連携協定」を締結し、以後、両市を中心として、教育、研究、地域貢献活動を進めている。大学全体として取り組む「COCOROE プロジェクト」のひとつに、地域との連携活動を位置づけることで、学部を超え、また授業を超えて、様々な内容で地域連携の取り組みを行ってきている。

この「地域連携 COCOROE プロジェクト」に関連する授業として、2015 年以降からの学修カリキュラムとして「地域活性化概論」、「地域連携インターンシップⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」を開講している。これらはいずれも、全学部生が履修できる共通教育科目であり、半期、15 回の授業でそれぞれ 4 単位が付与される。

基礎、総括となる科目である「地域活性化概論」は、街の産業、歴史、市政、福祉等についての座学講義を受け、最後に市役所、商工会、まちづくりリーダーへのプレゼンテーションを行うことが単位取得の要件となっている。また、実践的な役割を持つ「地域連携インターンシップⅠ、Ⅱ」において、地域広報冊子『こよみ手帳』の作成配布、「地域連携インターンシップⅢ、Ⅳ」においては、地域紹介映像・動画や、地域ブログの作成がそれぞれ進められてきた。

さらに、2019 年度からは将来、観光、教育、産業など様々な分野で、地域と連携した活動に携わる未来のリーダーの育成を狙いとして、地域について一定の学修を行ったことを証明する「地域共創プログラム」がスタートしており、地域活性化概論 2 単位を必修、演習を伴うインターンシップ科目のいずれか 2 単位を選択必修とし、20 単位以上の関連選択科目の単位を取得し、合計 24 単位を取得することにより「地域連携プログラム」の修了認定証明書が発行されることとなった。公的な資格ではなく、本学独自の学内資格として位置づけられるものである。

本学「教育研究実践論集 第5号」¹においては、地域連携関係授業における活動、趣旨、課

¹ 『本学における地域連携COCOROE プロジェクトのこれまでの取り組みと今後の展望』…… 木村三千世・天野了一・伊藤 重男、隅田孝・津崎克彦・吉田祐一郎 四天王寺大学教育研究実践論集第5号 2018.3

題、取り組みの詳細を紹介している。また、続く「教育研究実践論集第6号」²⁾においては、2017年度前期、2017年度後期と2018年度前期に筆者の担当した「地域ブランド研究」、「地域連携インターンシップⅢ、Ⅳ」における取り組みを紹介した。その内容は、学生にとって馴染みの深く、また一般的に検索、利用がされやすいブログ形式のホームページの作成演習と、学生が地域を取材し、写真を撮影、記事を執筆、公開する作業とその成果、実施上の課題について「地域課題解決奨励金」³⁾の活用報告を兼ね紹介したものである。

これと関連する形で、2017年度、2018年度の2年間にわたり、関連する授業の履修者や、ゼミ生から、まちづくりや地域おこし、ボランティア活動に関心のある学生を募り、羽曳野市・藤井寺を中心とした近隣地域で開催される様々なまちづくりイベントや行事に参加した。その運営や現場でのボランティアを通じて、まちづくりや地域貢献について体験的に学び、将来のまちづくり活動に関心を持ち取り組むリーダーを育成することを狙いとした活動を、同奨励金の一部を活用して実施してきた。本稿ではその活動の具体内容や、実施要領、教育上の成果、見えてきた課題を紹介する。

2. 地域連携活動への学生の参画

(1) 学生の地域ボランティア参加とその趣旨、費用

学生が地域連携活動として取り組み、地域について体験的に学ぶことを狙いとして、筆者は授業時間を活用、あるいは放課後や、予め設定した土日、休日に学生を引率して、様々な種類のボランティア活動を着任以来、毎月随時行っている。

地域でまちづくり協議会、NPO、自治体、寺社、民間団体等、様々な主催者が開催する各種のまちづくりイベントや、藤井寺の公式キャラクターである「まなりくん」の活動などについて学生に案内し、地域活性化関連授業の履修者を中心に広く参加を募った結果、毎回多数の学生がボランティアとして教員の引率、監督の下で活動を行い、案内、準備、運営、片付けなどの仕事に取り組むようになっている。これらのイベントを企画している地域のリーダーや、商店主の方をはじめとする、まちの方々との交流も深めることができた。

これらのイベントの大半については、枠組み自体は大学や、学生自身が企画、運営するものではないが、出店系については、ゲームや模擬店の企画など、主体性を持って独立採算で取り組んでいるものもある。

2017年度と、2018年度、即ち2017年4月から、2019年3月までの、筆者の引率により実施した地域ボランティア活動を【図表1】に示す。

学生の交通費や参加費の一部について、授業に紐付いたものについては、履修者に対して「学

²⁾『地域連携プロジェクトによる地域活動とブログによる紹介について（地域課題解決奨励金事業 報告）』
天野了一 四天王寺大学教育研究実践論集第5号 2019.3

³⁾ 本学で学部学科を問わず、審査を経て地域連携に関する研究や活動に供与される奨励金。1年間で、1テーマ10万円以内。

【図表 1】取り組んだ地域活動（2017 年度、2018 年度）

日程	内容	場所
2017 年度		
2017.4.23	宮子屋 道明寺糰（ほししい）と桜餅づくり	道明寺
2017.5.4	道明寺歴史まつり	道明寺
2017.7.25	道明寺天満宮天神祭	道明寺
2017.7.29	宮子屋 土師氏のお話と埴輪づくり	道明寺
2017.10.9	まなりくんバースデーパーティ、（まち）ウォーク	土師ノ里
2017.10.28	デラハロ（ハロウィン）	藤井寺
2017.10.29	宮子屋 香道と、においぶくろづくり	藤井寺
2017.11.18	ゆるキャラグランプリ	三重県 長島
2017.11.26	藤井寺 MIX 古墳プロモーション（FRAP）	藤井寺 津堂城山
2017.12.27	南河内ゆるキャラフェスティバル 兼 初恋ドーナツコンテスト	太子町 和みの広場
2018.1.20	辛国神社万灯籠 ランタンワークショップ	藤井寺
2018.2.4	辛国神社 星まつり	藤井寺
2018.2.10	宮子屋 梅酒づくりと道公 梅の話	道明寺
2018.3.25	FRAP ハレマチビヨリ 第 1 回	藤井寺 津堂城山
2018 年度		
2018.5.4	道明寺歴史まつり	道明寺
2018.5.27	宮子屋 道明寺粉と桜餅づくり	道明寺
2018.7.28	宮子屋 土師氏の話とはにわづくり	道明寺
2018.10.8	まなりくんバースデーパーティ、ウォーク	土師ノ里
2018.10.21	宮子屋 鶯の話 苔テラリウム作成 インターナショナルウォーク藤井寺 Vol.1	道明寺
2018.10.27	デラハロ（ハロウィン）	藤井寺
2018.11.11	まちマルシェ 羽曳野	羽曳野市 峰塚公園
2018.11.17-18	ゆるキャラグランプリ東大阪	東大阪市 花園
2018.12.2	インターナショナルウォーク藤井寺 Vol.2 文化遺産巡り	土師ノ里 ～藤井寺
2019.2.3.	インターナショナルウォーク藤井寺 Vol.3 兼 辛国神社ほしまつり	藤井寺
2019.2.16	宮子屋 梅酒作りと道真公 梅の話	道明寺
2019.3.24	FRAP ハレマチビヨリ 第 2 回	藤井寺 津堂城山

外活動奨励金」⁴、授業の枠を超えた活動については「地域連携活動費」⁵を活用し、学生の交通費等に充当している。また、取材活動に関係した交通費以外の、物品購入や、模擬店関連資材、道具類の購入については、大学からの「地域課題解決奨励金」⁶を活用しており、また、主催団体から日当という形で一律の交通費、食費に充当する手当が拠出される場合もあり、学生の個人負担を抑えながら活動を実施することができた。

（２）具体的内容

活動については毎年恒例の行事として開催されるものと、単発のものがあり、その趣旨や目的、規模や参加者、実施主体も様々である。主要なものについて事業主体別に紹介していく。

①宮子屋（主催：まなリンク協議会）

まなリンク協議会は、藤井寺市が公認し、予算措置を行う、藤井寺まちづくり３団体の１つである。他の２団体である道明寺まちづくり協議会、藤井寺駅周辺まちづくり協議会が、それぞれの決まったエリアの街づくりについて、独自イベント実施に加え、ハード面も含めた提案などを地域住民や商店主が主体となって行っているのに対し、まなリンク協議会は、藤井寺全域を舞台とし、藤井寺市の公認キャラクターである「まなりくん」の市内外での活動や、各種の家族で市内外の人が参加できるイベントを行うことと、藤井寺の魅力を広報誌やインターネット、SNSなどで広く発信していくことを主たる事業の内容とする。

まなリンク協議会は2014年に発足し、地元で古民家再生等を得意とする不動産ディベロッパー代表の西村剛氏が発足以来会長を務めている。2016年度から本学より筆者が副会長に就任している。藤井寺市民以外も含め、藤井寺を愛する人が幅広く様々な立場で自由に活動することが特徴となっており、本学学生も含め老若男女、約20名のメンバーが活動している。




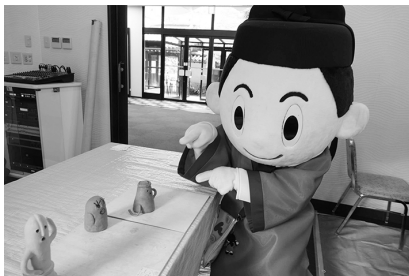


2015年度から、文化庁予算で「古（いにしえ）をリンクするプロジェクト」として協議会がスタートした企画が「宮子屋～神社を学びの場に」である。寺子屋を神社で行うという、これまでにない新しいコンセプトで、道明寺天満宮にて、宮司の南坊城光興氏からの歴史に関する講話に引き続き、香道、梅酒、埴輪、和菓子など様々な日本文化に関する体験型ワークショップを実施するものである。毎回、約30名から40名、お子様も含めて、家族で参加できる内容としている。

本学学生は、当日の運営について準備から片付けまで、内容については毎回登場する「まなりくん」のアクターやアシスタント、講座を前年度等に体験している学生についてはワークショップのアシスタントとしても活動する。毎回、2～3名程度の学生ボランティアが参加しており、2017年度は3回、2018年度は3回実施した。【写真1】【写真2】【写真3】【写真4】【写真5】【写真6】

⁴ 一つの授業科目で総額5万円を限度、一学生交通費2000円を限度に、交通費半額と利用料を大学が負担。

⁵ 1回の活動につき2万円を限度、一人2000円を上限として学生の交通費全額を大学が負担。

⁶ 1プロジェクト年間10万円を限度として、物品購入や取材関連、契約サービス費用等を大学が負担。

<p>【写真 1】宮司さんからの梅と道真公の話</p> 	<p>【写真 2】梅酒作りを体験する本学生</p> 
<p>【写真 3】司会を行う本学生</p> 	<p>【写真 4】埴輪づくりと「まなりくん」</p> 
<p>【写真 5】完成した埴輪</p> 	<p>【写真 6】宮子屋に参加した子供たちと作品</p> 

②道明寺歴史まつり（主催：道明寺まちづくり協議会）

慶長 20 年（1615 年）、豊臣氏が滅亡した大坂夏の陣・道明寺の戦いの舞台となった藤井寺市道明寺で、合戦のメモリアルとして 2014 年から「道明寺合戦まつり」が行われることとなった。その時代背景を、当初の戦国時代だけでなく、古墳時代から江戸時代まで、全時代へと広げてリニューアルし、2017 年から「道明寺歴史まつり」と改称した。毎年 5 月のゴールデン・ウィークの中の一日で、道明寺まちづくり協議会が主催となり、藤井寺市役所の後援や地域企業のスポンサーシップの下実施している。2019 年度で歴史まつりとしては 3 回目の実施となった。

行われる内容、プログラムについては、年により若干の変更がある。歴史装束や、甲冑などの仮装に身を包んだコスプレイヤー達が、道明寺天満宮での安全祈願に始まり、商店街を抜け、

石川河川敷までのパレードを行うことを皮切りに、特設ステージで、合戦の犠牲者慰霊、歴史に関する仮装やコント（寸劇）や、地元のバンドや演奏家のライブが行われる。そして最後のハイライトが、子供たちによるチャンバラ大会である、東西の2チームにわかれ、スポンジ製の刀で、肩につけた紙ふうせんを叩いて落とすという楽しいゲームである。日本学科、経営学科を中心とする本学の有志学生は、運営ボランティアとして、会場設営や撤収、片付け（男女）、着物や歴史装束に身を包んでプラカードを持ち、行列を先導する役割（女子）、甲冑着用や足軽姿で行列の安全確保と交通整理（男子）、体調不良者の救護（男女）、本部での受付や、景品準備（女子）、チャンバラ大会の準備や安全確保（男女）などに力を合わせて取り組んだ。2018年は8名、2019年については20名の学生が参加した。【写真7】【写真8】【写真9】【写真10】【写真11】【写真12】【写真13】【写真14】

<p>【写真7】天満宮を出発</p> 	<p>【写真8】歴史装束で先導する本学生</p> 
<p>【写真9】救護で活躍する本学生</p> 	<p>【写真10】男子は甲冑姿で活動</p> 
<p>【写真11】IBU ボランティアメンバー</p> 	<p>【写真12】宮司さんと筆者のコント</p> 

【写真 13】チャンバラ大会の運営を担当	【写真 14】設営や撤収を行う本学学生
	

③まなりくん活動（主催：まなリンク協議会）

藤井寺市の公式キャラクター（ゆるキャラ）である「まなりくん」は、奈良時代に阿倍仲麻呂らと唐へ渡り、皇帝に重用され、36歳の若さで現地で亡くなった、藤井寺市出身と言われる遣唐留学生「井真成（いのまなり）」をキャラクター化したものである。2004年に中国の西安市で「国号日本」との記載がある墓誌が発見された。これは、日本という国名の記載された文書として海外にあるものでは世界最古のものである。これをきっかけに、2005年に公募でキャラクターを選定、2009年には着ぐるみが作成され、以後、まなりくんは藤井寺のシンボルキャラクターとして、藤井寺のPR活動や、小学校での郷土教育活動を行ってきている。

前述のまなリンク協議会では、2014年の発足以来、まなりくんサポーター（まなサポ）のメンバー募集や、まなりくんの出張活動に取り組んでいる。「くまモン」や「ふなっしー」「ひこにゃん」をはじめとする、近年の「ゆるキャラブーム」に乗り、様々なイベントの実働部隊として藤井寺のPR活動を行っており、知名度や人気が高まってきた。

全国のゆるキャラが集結し、人気を競い合う「ゆるキャラグランプリ」については毎年、年数回、全国で実行委員会方式で開催されているほか、またローカルレベルでも様々なゆるキャライベントが開催されており、その中から毎年数回、物理的、時間的に出場可能なものを選び参加している。

学生については、まなりくんのアクター、およびアテンドのほか、大規模イベントについては、市役所の設置する観光ブースのスタッフとしても活動を行うことになる。着ぐるみという特性上、特に夏場においては長時間の活動が困難で、また複数の交代要員が必要であり、更に一定のアクションについて練習を行う必要がある。身長が大きい男子（170センチ以上）などはまなりくんのアクターには向かない。

2018 年については、三重県の長島での「全国ゆるキャラグランプリ」、太子町の「南大阪ゆるキャラグランプリ」において、2019 年は東大阪・花園ラグビー場での「全国ゆるキャラグランプリ」でのまなりくん活動に、本学学生が参加した。その際には藤井寺市役所ブースの運営などでも活躍した。その他、毎年秋に開催される、まなりくんバースデーパーティとまちウォーク、その他単発のイベント等でも要請により、まなりくんの出演活動に取り組んでいる。

【写真 15】 【写真 16】 【写真 17】 【写真 18】 【写真 19】 【写真 20】

<p>【写真 15】 藤井寺市長とまなりくん</p> 	<p>【写真 16】 商店街でのまなりくん PR</p> 
<p>【写真 17】 藤井寺ブースを運営する本学生</p> 	<p>【写真 18】 まなりくんを紹介する本学生</p> 
<p>【写真 19】 羽曳野市長と本学生</p> 	<p>【写真 20】 つぶたん（羽曳野）とくまモン</p> 

④デラハロ＝藤井寺ハロウィン（主催：藤井寺駅周辺まちづくり協議会）

2012年より、商店街の活性化、集客を狙いとして、当時ブームになりつつあった「ハロウィン」のパレードや、ステージ等のイベントである「デラハロ（藤井寺ハロウィン）」がスタートした。当時はハロウィンを地域おこしとして行っている商店街はあまり例がなかったため、話題となり、毎年10月末に開催されるひとつの地域イベントとして定着するとともに、年々規模や参加者数を拡大、現在では地域外の子供や大人も参加するようになっている。また、道明寺エリアも含めた、藤井寺の飲食店で、チケット制で食べ歩き、飲み歩きを楽しむことができる、パルイベント「デラバル」も同時並行で開催されている。

「デラハロ」については丸一日のイベントとして開催され、商店街のパレードと、駅南側にある「ブクンダ公園」でのライブイベント、お笑いイベントや、各種夜店、ブースなどがその主な内容である。本学の学生については当初の業務はパレードの安全確保のみであったが、2016年より、お子様向け夜店、模擬店のスタッフボランティアを「地域連携インターンシップ」の受講生を中心に試験的に開始した。そして2017年、2018年については、授業内での企画や事前準備を進め、学生が自らゲームや景品を企画し販売するブースを設置し運営することとした。道具の作成から、景品の仕入れやゲームの当たりの比率、損益分岐点などの予測を行い、ビジネスの演習としての位置づけと教育効果も持たせることも狙いとした。また、ハロウィンイベントであることから、様々なキャラクターのコスチュームで、楽しみながら参加できることも特徴になっている。【写真 21】【写真 22】【写真 23】【写真 24】【写真 25】【写真 26】【写真 27】【写真 28】

<p>【写真 21】葛井寺前で風船配り</p> 	<p>【写真 22】パレード誘導</p> 
<p>【写真 23】子供向けゲームの準備</p> 	<p>【写真 24】まなりくんアattendを担当</p> 

<p>【写真 25】全員コスプレで営業開始</p> 	<p>【写真 26】現市長と前副市長もご来訪</p> 
<p>【写真 27】インスタ投稿も仕事のひとつ</p> 	<p>【写真 28】大人気となったゲーム屋台</p> 

⑤FRAP＝藤井寺ラッピングプロモーション・ハレマチビヨリ（主催：FRAP 実行委員会）

藤井寺には、近年、独自の魅力を持ったお洒落で高感度な店舗や、手作り作家やクリエイター系の若い店主が多く集まり創業している。これらの店が、古くからの商店街や、長い歴史をもった、酒、茶、和菓子、料亭などの老舗ともお互いに協力しながら、新しい魅力を創造し、発信していくことで、魅力的なまちづくりをさらに進めていきたいとの思いから、2016 年年末より、個店店主を中心とする有志が古民家に集まり「藤井寺 MIX」として、企画を練ってきた。その結果、中小企業庁の予算（3 年間 1500 万円）を得て、藤井寺の地方創生事業の 1 つとして、新たなプロモーション活動「FRAP(エフラップ)が 2017 年 3 月にスタートした。



FRAP とは、Fujiidera Wrapping Promotion のことで、市内の様々な場所に点在する各個人店が、点と点を結ぶようにネットワークを築き、やがて面となり包込むように、新たなムーブメントを起こそうという想いが込められている。統一デザインを用いたプロモーションやコラボレーションによる商品開発、共同の情報発信、イベントなどを進めていくためのプロジェクトである。本学からは天野がプロジェクトのアドバイザーに就任するとともに、大学との連携による様々な企画の推進を進めている。

プロジェクトへの学生の参画については、イベントの運営が中心であり、準備段階から、運営委員宅での打ち合わせに参加してきた。2017 年 11 月 26 日の古墳でのイベント「藤井寺 MIX まほら藤井寺」、2018 年 3 月 25 日の「第一回ハレマチビヨリ」、2019 年 3 月 24 日に「第二回ハレマチビヨリ」について、それぞれ約 10 名の学生が、教員引率の下、ボランティアとして活

動を行った。これらのイベントは、藤井寺駅から徒歩 10 分ほどの津堂城山古墳にあり、同史跡は立ち入りや登頂が可能な数少ない整備された古墳である。

第 1 回、第 2 回の「ハレマチビヨリ」については、本学の公認ボランティアサークルである「ポコ・ア・ポコ」の学生により、お子様向けのイベントである「古墳の紙ひこうき飛ばし大会」が企画実施された。それ以外の地域活動ボランティア学生については、設営や出店店舗支援、駐輪誘導、安全確保、本部事務、会場案内、撤収清掃などの業務を分担して行った。2019 年度は加盟店舗、招待店舗による飲、雑貨の販売に加え、藤井寺出身の絵本作家である長谷川義史氏によるサイン会や地元ミュージシャンの演奏、市役所による世界遺産展示ブースも設置された。主催者発表によると、一般参加者（集客）数は 3000 名程度であった。【写真 29】【写真 30】【写真 31】【写真 32】【写真 33】【写真 34】【写真 35】【写真 36】

<p>【写真 29】津堂城山古墳</p> 	<p>【写真 30】市長と本学ボランティアスタッフ</p> 
<p>【写真 31】行列のできたブース</p> 	<p>【写真 32】子供たちに折り方を指導</p> 
<p>【写真 33】景品を準備する本学生</p> 	<p>【写真 34】紙ひこうき大会本番</p> 

<p>【写真 35】 お子様に景品を配布</p> 	<p>【写真 36】 片付けと撤収を行う本学生</p> 
--	--

⑥藤井寺インターナショナルウォーク（主催：まなリンク協議会）

2018 年度より藤井寺の魅力在海外の人に伝えていくことを目的として新規にスタートしたプロジェクトである。本年度は本学に冬学期、半年のスケジュールで交換留学生として滞在している、中国の浙江工匠大学の学生 12 名を中心に、他大学の学生や大学生も一部含めて、3 回シリーズとして半日の藤井寺の各エリアの歴史スポットや寺社を巡るとともに、日本酒や日本料理、茶席など様々な日本文化を楽しみながら学ぶことを目指した。

なお、運営については、協議会スタッフ、本学引率教員 2 名、ガイドとして藤井寺市観光協会所属の、専門知識と経験を持つシニア観光ボランティア、歴史やボランティア活動に関心を

<p>【写真 37】 天満宮 宮司さんから修羅の説明</p> 	<p>【写真 38】 石川河川敷でピクニック</p> 
<p>【写真 39】 井真成 墓標見学</p> 	<p>【写真 40】 岡田園 古民家訪問</p> 

<p>【写真 41】 日本茶講座</p> 	<p>【写真 42】 藤本酒造訪問</p> 
<p>【写真 43】 酒蔵見学で女将さんより説明</p> 	<p>【写真 44】 辛国神社で安全祈願</p> 

持つ本学日本学科の日本人学生 4, 5 名が運営ボランティアとして参加した。

行き先については以下の通りである。

○2018.10.21 道明寺エリア

道明寺天満宮～石川河川敷～宮子屋参加

○2018.12.2 土師ノ里～道明寺～藤井寺エリア

土師ノ里～鍋塚古墳～中津姫陵古墳～澤田八幡宮～小室山古墳～応神天皇陵古墳～梅迺家～藤井寺

○2019.2.3 藤井寺エリア



藤本酒造～岡田園茶店舗～葛井寺～アイセルシュラホール～辛国神社

【写真 37】 【写真 38】 【写真 39】 【写真 40】 【写真 41】 【写真 42】 【写真 43】 【写真 44】

⑦その他（民間等主催）

羽曳野エリアを中心に活躍する作家系個人店舗を中心に、年 2 回、「まちまるしえ」が古墳のある、峰塚公園で開催されている。FRAP ハレマチビヨリと内容的には類似しているが、こちらは行政のかかわらない純民間の収益イベントで、約 100 店舗が出店する、一層大規模なものである。第 5 回の開催となる 2018 年 11 月 11 日（日）については、運営事務局から協力要請とブース提供の申し出があった。そこで、地域ブランド研究受講生を中心に、地域での起業に関心を持つ 5 年生を加え、地域ビジネスの実習も兼ねて、18 年度のデラハロで行ったお子様向けの屋台を改良して一日出店を行った。準備や後片付けについて、ボランティアとしてお手伝いを行うとともに、収益とビジネス体験も兼ねた模擬店舗の運営体験が参加学生の成果となった。

【写真 45】 【写真 46】 【写真 47】 【写真 48】

<p>【写真 45】 峰塚公園でのまちまるしえ</p> 	<p>【写真 46】 ゲーム屋台を設置</p> 
<p>【写真 47】 個別ブースで起業を学ぶ</p> 	<p>【写真 48】 今回の参加メンバー</p> 

3. 成果と課題

(1) 学生の成長

学生たちが将来、まちづくりにリーダーシップを発揮する地域市民として成長していくためには、現場の空気を吸いながら、失敗も含めた様々な実体験を経験し、自ら課題を発見し、考え抜いていくことが必要であり、そのためにはボランティアとしての実習活動が不可欠である。「地域連携インターンシップ」としての授業の設置意義はそこにある。そして、学生が現場での地域ボランティア実習で得られる「学び」については、以下のようなものが考えられる。

①まちづくり、まちおこしの重要性認識

若者が、地域で自ら活動する人材となるためには、地域活性化について問題意識を持ち、動くようとするモチベーション、動機づけが必要である。少子高齢化、地域の衰退などの現状や対策については、座学で学んでも、なかなか自分のものとして実感が出てこないが、現場の空気を吸いながら、そこで動いているまちづくりプロジェクトにかかわる人の熱意が、集客や活性化に直接かつ大きく貢献していることを体感することで、その重要性の認識に繋がる。さらに様々な課題の中で自らは何ができるのかとの問いかけが行われ、結果、「自らが、若者が今動かねば、まちは変わらない」という結論がモチベーションに繋がることが期待される。

②プロジェクトの運営ノウハウ

まちおこしプロジェクトの実施、運営について、当日の学生ボランティアは、時間管理、人的資源の配置、物的資源の準備、安全確保や誘導、組み立て、撤収など、様々な作業を体験することになる。天候急変や、不慮の事故の発生、予想もしなかったクレームなど、様々な突発的問題への対処も求められる。また、模擬店営業を伴う場合は、店舗づくり、価格設定、集客など、小さいながらもマーケティングを考え、体験する場ともなり得る。こうした一連の流れを経験することにより、次回以降はリーダーとして活動し、後輩を育てる役割を担う人材も誕生してくるようになる。

また、イベント当日のボランティアのみならず、特に意欲と深い問題意識をもった学生は、企画、準備段階から実行委員会等に混じり、予算確保や役所、公的機関、業者など、関係箇所との折衝などに最初から関わることで、プロジェクト全体の運営が見えてくる。他所でも応用できるまちづくりプロジェクトのリーダーとしてのノウハウが蓄積される。

③ボランティア精神とリーダーシップ

現在、藤井寺地域において、まちづくり組織の中心で活動しているのは、学生よりも二回り以上年齢を重ねた、40代、50代、60代以上の年齢層が中心であるが、中高年が実に生き生きと情熱をもって、リーダーとして街の活性化のため、日々体を張って志と心意気を誇りに活動に取り組んでいる。それは当然無報酬であり、これまで、アルバイトとして報酬を目当てに仕事に触れてきた学生にとって、異なった価値観や、志高い心意気に触れることになる。それがボランティア精神の涵養に繋がっていく。

もちろん、実際の参加メンバーの中には、授業や単位のためにとりあえず、あるいは仕方なく参加したという者も少なからず存在している。また、ボランティア活動を就職活動の「PRネタ」にしたいだけの学生もいる。中には投げやりな態度やボイ捨てなどをする不心得者さえもいる。そのような学生メンバーをどのように前向きにプロジェクトに向き合わせるか、また、現場での学生の意見のぶつかり合いや、上司に当たる地域リーダーや、お客様からの叱責、クレームに対してどう対応するか、といった点で、人と人とのコミュニケーションと、リーダーシップを自然に学んでいくことになる。また、地域の方々の感謝の声や、笑顔の創出こそが最大のボランティアの価値であることに気づく学生も生まれる。そのような学生は将来もリーダーとして活躍していく素質が充分である。

(2) 参加学生の成長とその声

次に、実際にプロジェクトに参加した学生たちの成長の軌跡や、感想を紹介する。

①日本学科 Aさん(女子卒業生)

日本学科で日本文化に関心を持っていたAさんは、一年生のときは、「あまり何も目立ったことはせず、適当に過ごしていた」学生だったという。2年時に、「地域活性化概論」、および「あきない実践研究」の授業を受講し、地域動画の作成に取り組んだことをきっかけに、地域のま

ちづくりや、その取材活動に関心を持つようになった。まなリンク協議会の活動や、教員が紹介する、大学の授業の枠を超えた京都の町家活用や大阪府能勢町など、まちづくりプロジェクトにも積極的に参加するようになり、「あまり前に出なかった自分が、前向きに様々なことに取り組み、多くの人に触れたことで、自分が大きく変わり、人生の方向性を見出した」と振り返る。

卒業した現在は、地域の情報を発信する企業に就職し、地域で作った人脈やノウハウを生かしつつ、広報や記事の作成の仕事を行うとともに、まなリンク協議会スタッフとしても活動しており、地域では知られた存在である。現在授業で行う地域プロジェクトにも出入りし、アドバイスをを行うなど、後輩の育成に努めている。

②経営学科 E さん（男子 3 年）

E さんは、祖父の家が商店街で事業をしており、商店街の衰退に心を痛める中、高校生時代からもともとまちづくりに興味があったところに、たまたま本学でオープンキャンパスに参加した。地域づくりや商店街活性化が体験的に学べる大学ということに魅力を感じ、本学への進学を決めた。以後、様々な形で地域活性化ボランティアに関わるようになり、3 年生になった現在では、ゼミで地域活性化を本格的に学ぶとともに、SA（スチューデント・アシスタント）⁷として、地域連携インターンシップの授業で、大学の地域活性化ブログ「ふじい deLovers のデラ充日記」の作成や、地域ミニコミ誌の作成に SA として活躍している。ボランティアではリーダーの役割を果たしており、将来は公共政策にかかわる仕事をしたいと考えている。

④経営学科 H さん（男子 4 年）

本学経営学科に入学した H さんは、1 年の時には授業が全くおもしろくなく、大学に来る意義を見いだせなくなった結果、授業にもほとんど来ることがなくなり、単位も取れていない状況であった。しかし、本人曰く、「たまたま何気なく履修した地域連携インターンシップで、地域貢献ボランティア活動に参加したことが、自分の大学での居場所の発見と、やりたいことを見つける転機になった」とのことである。もともと、子供が好きで、アニメやキャラクター、フィギュアが好きなオタクであったことから、デラハロでのコスプレ支援、子供向け模擬店の運営、FRAP ハレマチビヨリの運営、歴史まつりの運営など、様々な現場での活動に生き生きと取り組むようになり、一年の時に落とした単位も挽回し、現在では地域活動のリーダーとして SA も務めている。将来は、フィギュアやグッズ、カードなどを扱うショップなどでの起業を夢見つつ就活を行っている。

⑤経営学科 O さん（男子 3 年）

O さんは、子供と遊ぶことが大好きな明るい性格で、入学以来、大学公認のボランティアサ

⁷ 授業内で、学生の作業を支援したりアドバイスをを行う役割を大学から委嘱された学生。成績条件と選考により優秀学生が選ばれ、勤務時間にあわせて報酬が支払われる。

ークルでも活動している。ゆるキャラグランプリ、宮子屋などでは、毎回、大汗をかきながらまなりくんのアクターとしての役割をこなしている。古墳イベント、合戦まつり、デラハロはじめ、様々な子供の遊び関係のボランティア事業ではリーダーシップをいかんなく発揮し、地域の子供たちからも大人気で、ニックネームで呼ばれるほどの知られた存在で愛されている。また、FRAP ハレマチビヨリの紙飛行機大会の運営については、構想段階から会議に参加し、メンバーを集めて成功裏に導くなど、多大なノウハウを蓄積しており、今では地域の子ども食堂などの運営責任者からも直接声がかかるなど、地域の方からの信頼も絶大である。

⑥経営学科Fさん（男子5年）

Fさんは地域での高齢者問題や、地域活性化と地域での起業について関心があり、ゼミでは、高齢者が趣味を生かした手作りの商品販売や、ワークショップを行うことで、域外の創出や現金収入の増大、異世代や地域館交流を目指す、シニア市民マーケット「趣味市場」の事業計画を作成した。そのプランは、学内ビジネスコンテストで入賞し、さらに、関西ベンチャー学会ビジネスプランコンテストで、会長賞を受賞し、現在、5年生として休学しながら、プロジェクトの実現に向け、準備を進めている。その過程で、「FRAP ハレマチビヨリや」、「羽曳野まちなしえ」「デラハロ」へのボランティア参加や、リーダーへのヒアリング、出店体験などから様々な示唆が得られたとのことである。

（3）課題と今後の展望

今日、サラリーマン化の進展、マンション化の進展、そして人々の生活の価値観の変化により、「隣は何をする人ぞ」の言葉に代表されるような、近隣や地域とつながりを持たない人、関心を持とうとしない人、地域で孤立した人が増えている。

また、商業施設についても、価格や品揃えで魅力のある郊外型大型スーパーや全国的規模での知名度の高いチェーン店が台頭する一方で、地域の個人店や商店街は苦戦を強いられ、シャッター街となるところも目立つ。

こうした中で、藤井寺や羽曳野のような、地方都市、住宅都市、衛星都市については、全国レベルで高齢化、少子化が進む中、地域の特色や個性を際立たせるまちづくりをすすめ、若者の地域への定着を進める必要に迫られている。

また、高齢化が進む中、地元商店街の店主やリーダーもまた高齢化している。旧来の商店街においては、新しい感性をもった若者の起業を促すことで、地域の新たな魅力創出とブランド力の強化、リノベーションが進んで行くことが期待される。「よそ者、若者、馬鹿者」が地域を変えと言われる中、地域連携を体験的に学んだ本学出身の若者の活躍に大いに期待したい。

これからの令和時代の大学は、学生の入り口（入学者確保）、出口（就職先や進路の拡大、起業立地先）として、一層地域とのつながりを大切にしていかなければならない。様々な専門分野の教員、色々な立場の職員が地域のキーパーソンと普段から積極的に関わり合い、信頼関係を築いておくことも重要である。

また、今回紹介したような様々なボランティアに加え、産学連携による商品開発や地域ブラ

ンドの構築、インターンシップや職業体験、アルバイト募集、福祉、教育、歴史、観光など、まだまだ取り組まれておらず、今後地域と大学が連携できる分野はたくさんある。特に、当地では、5月14日に決定した「百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録」は、大変に時宜を得たテーマである。

しかし、授業担当教員の熱意だけでは地域連携は進展、成功は難しい。大学として地域連携プロジェクトを最重要事項と捉え、費用面、マンパワー面からも支援していく必要がある。資金面では、交通費については学内予算から一定額は支給されるが、昼食費や日当が出ないため、学生の個人負担感は少なくない。経済状況の好転しない中で、奨学金を借りている学生が大半を占めており、自己負担をしてまでボランティア活動ができない学生は多い。そのために担当教員が負担することになり、活発化する程、経済的負担も増えることになる。

また、教職員のマンパワーについて、ほとんどの場合、地域活動は土日や休日に行われ、その打ち合わせは深夜におよぶこともあるが、休日出勤や時間外勤務規制、学内の考え方やルールなど、それを阻むような仕組みも少なからず存在しており、意識改革に加え、評価報奨の仕組みが必要である。また、地域連携についてフルタイムで専門的に取り組む部署やスタッフも必要となってくる。

学生については、ホームページ、パンフレットやオープンキャンパスや模擬授業等で積極的にPRすることで、地域連携に熱心な特徴のある大学として、地域問題に関心を持つ高校生の受験を促す戦略も必要であろう。

現在、大学基礎演習や、地域活性化概論の講義において、学生に地域活動への参加を案内し、関心をもった学生をLINEグループに参加させ、組織化を行うとともに、SNS上で活動案内を行うことで、参加メンバーを確保、拡大している。また、写真などはアルバム状にアップし共有しており、学生がハッシュタグをつけ、個別にInstagram上で公開、シェアすることも推奨している。一方でほとんどの教職員はSNSを使用していない。

また、学生の評価をどうするかも課題である。授業に紐付いた活動については、活動に真剣に取り組んだ学生については、ルーブリック評価なども含めて、そうでない学生と区別し、正當な評価を行うことも重要である。

学生については、本当の所は、「授業とは関係なく、単位や点数よりももっと大切なものがあること」を学んでいくこと、教職員については、「大学が地域の発展のためにどう貢献できるか、自分が何をできるかを日々真剣に考え、考えたことをそれぞれの立場からすぐに実行に移すこと」を期待している。

謝辞

最後に、ボランティア活動の機会を提供いただき、様々な学生にご支援、励まし、お叱りを頂いた、藤井寺、羽曳野の各地域リーダーの方々に、この場をもって心から御礼申し上げたい。